

関口日記

せきぐち・とうえもん

作者: 関口藤右衛門(初代)(1731-1792)ほか関口家当主

成立: 宝暦12年(1762)-明治34年(1901)



解題

Keyword

- 生麦村
- 名主
- 「孝行萌草」
- 「金水初稿」

武蔵国橘樹郡生麦村(現・鶴見区生麦町)に居していた関口家の歴代当主5人が代々書き継いだ日記。江戸後期から明治中期までの約140年間、ほぼ毎日記述がある。このように長期にわたる農民の日記は珍しく、当時の人々のくらしぶりや世相を具体的に知ることができる。

■ 作者

関口家は小田原北条氏の時代、子安郷を支配した土豪関口外記の末裔と伝えられている。生麦村の草分百姓(くさわけひやくしょう: 新たに土地を開拓して新町村を設立した人)であったが、本日記を著した関口家は、宝暦年間(1751-1763)に本家から分かれた分家である。

初代藤右衛門(藤助)は、農業の傍ら寺子屋を開き、生麦村及び周辺の村の子どもたちを教育した。漢方医、質屋を営み、天文の素養もあったという。

二代目藤右衛門(藤五郎・東吾・東園)は村名主を務め、寺子屋の師匠としても活躍した。東海道筋ではよく知られた文化人であり、享和3年(1803)刊行の『東海道人物誌』では、「医学・狂歌、号梧桐庵、又関鳥金」と紹介されている。また薬の製造販売にも従事し、「白散・黒散」と呼ばれる婦人の懐胎を調節する薬を扱っていた。関口家に伝わった広告文によると、江戸の医者から製法を伝授されたものであり、江戸馬喰町の大坂屋治兵衛と品川宿の紀伊国屋喜右衛門が販売所であったようだ。また80歳を迎えたことを記念して、天保14年(1843)には、寺子屋で教え続けた「処世訓」をまとめた『孝行萌草』を、江戸の錦耕堂から出版している。挿絵には藤右衛門とおぼしい人物が子どもたちを教えている様子が

描かれている。

三代目東作(金水・亨二)は江戸の儒者、和氣柳斎の塾に入門した漢学者で、文政元年(1818)には『金水初稿』という漢詩集を出版している。のち村に戻り、名主を務め寺子屋も継いだ。塾生時代の東作の日記は、当時の江戸の私塾の様子を知る資料として「徳川時代の私塾生活 - 和氣塾塾生日記」(野村兼太郎)の中で紹介されている。

四代昭房(東右衛門・梅二)は幕末に名主、維新後は戸長を勤めた。安政元年(1854)ペリーの2度目の来航の際には、浦賀に異国船を見物に行っている。

五代昭知(英太郎)は村会議員、村会議長、助役、村長、県会議員と数々の公職を務めている。明治22年(1889)には立憲改進黨に入党し、政党・選挙活動も行っている。明治30年には諸売薬類化粧品販売を開業し、殺虫剤や防虫剤の製造を始めている。

■ 内 容

関口家の当主により宝暦12年(1762)から明治34年(1901)までの約140年間、ほぼ毎日のように記された日記。約90冊。冊によって「日記帳」「日時附込帳」「日記留帳」など様々な題がつけられており、それらを総称して『関口日記』と呼んでいる。

各冊の裏表紙には日記を書いた当主の名が記されているので、それによって筆者がわかる。しかし、当主が江戸行きなどで留守のときは、家族が代わって書きついたり、家族のメモなどによって、当主が帰宅後記したと思われる箇所もある。

内容としては、毎日の干支、天候、そして金銭の出入り、家族の出生・初節句・誕生日・奉公・婚姻・旅行・病気・死没等の生活情報が記されている。当主個人の私的な記録というよりも、家の経営を記録し後の参考にするという、家の日記としての半ば公的な性格をもっている。さらに二代目藤右衛門が名主になってからは、村の出来事、様子なども記述され、村役人としての公務記録にもなっている。東海道筋の様々な様子、事件、風説なども記されている。

生麦村は、東海道に面し、川崎宿と神奈川宿の間、江戸からわずか6里の地点にあった。海にも面しており船着場もあった。このような立地からか江戸に奉公する者も多く、住民はしばしば江戸にでかけており、また、商業活動に従事する者も多かったことが記述からわかる。関口家はこういった商人たちに営業資金を貸していたため、商人たちに関する記述は詳しい。

また二代目藤右衛門の娘千恵や三代目東作の娘お愛に関する記述は、農村女性の人生を知る上で、数少ない史料となっている。

幕末から明治にかけての、ペリー来航、生麦事件、新橋ー横浜間の鉄道開通といった歴史に残る大きな出来事も記述されており、変化の激しいこの時代の庶民の動向を具体的に知ることができる。

諸本

原本は生麦町在住の郷土史家池谷健治が、散逸する直前に入手し、昭和27年(1952)横浜市へ寄贈。市史編集室を経て、現在は横浜開港資料館が所蔵している。宝暦12年(1762)より文化2年(1805)までの日記11冊分は後日発見され、関口詮家より横浜市に寄贈され、原本は同じく横浜開港資料館が所蔵している。閲覧利用は複製本による。

なお関口家に伝わる文書記録も同じく横浜市に寄贈された。宝暦12年(1762)より昭和2年(1927)のものであり、幕末から明治時代初頭までの御用留(ごようどめ：村役人が村政執行に必要な文書や諸事項を書き留めた帳簿)を多数含む。現在「関口詮家文書」(約450点)として横浜開港資料館が所蔵し、公開している。閲覧利用は複製本による。

また日記を記した関口家とは別の、生麦村の関口家(関口次郎左衛門家)に伝わる文書記録(約1600点)は同じく池谷健治により神奈川県に寄贈され、現在神奈川県立公文書館が所蔵している。寛永2年(1625)から明治13年(1880)のものである。複製本は横浜開港資料館で公開されている。



史料本文を読む

<翻刻本>

- 『関口日記』全26巻 横浜市文化財研究調査会編集校訂 横浜市教育委員会 1971-1985 (横浜市文化財調査報告書8) [K06.1/1/8]
※別巻は刊行中に発見された宝暦12年より文化2年までの日記11冊分



史料についてさらに知る－参考文献－

- ◆内田四方蔵「『関口日記』の研究(一)」(『郷土よこはま』(61) 横浜市図書館 1971 [K05.1/15/61-66])
- 『江戸時代の横浜』横浜開港資料普及協会編 有隣堂 1983 [K25.1/30]
- 『『名主日記』が語る幕末-武蔵国橋樹郡生麦村の関口家と日記-』横浜開港資料館 1986 [K25.11/7]
- ◆内田四方蔵「関口藤右衛門-庶民生活史の貴重資料『関口日記』を遺す」(『人づくり風土記14』加藤秀俊 農山漁村文化協会 1987 [K28/182])
- 『横浜絵日記帖-見る歩く江戸時代』横浜市市民局 1994 (市民グラフヨコハマ89) [K05.1/63/89]
- 『日記が語る19世紀の横浜-関口日記と堤家文書』横浜開港資料館編 山川出版社 1998 [K25.1/60]
- ◆西川武臣「日記が語る19世紀の横浜-展示に出品した日記の中から-関口日記」(『開港のひろば』(64) 横浜開港資料館 1999) [ZC]

<時代背景等>

- ◆久木幸男・三田さゆり「19世紀前半江戸近郊農村における女子教育の一研究-武州生麦村『関口日記』から-」(『横浜国立大学教育紀要』第21集 横浜国立大学 1981 [Z370.5/42])
- ◆西垣晴次「『関口日記』にみえる幕末の生麦村」(『横浜開港資料館紀要』(3) 横浜開港資料館 1985 [K05.1/38/3])
- ◆長島淳子「幕末農村女性の行動の自由と家事労働-武州橘樹郡生麦村『関口日記』を素材として-」(『論集近世女性史』近世女性史研究会編 吉川弘文館 1986 [K25/118])
- ◆大口勇次郎「近郊農村と江戸-生麦村関口千恵の半生から-」(『幕末の農民群像-東海道と江戸湾をめぐる-』横浜近世史研究会編 横浜開港資料館 1988 [K25/128])
- ◆佐藤孝「『関口日記』に見る一名主の明治維新」(『幕末の農民群像-東海道と江戸湾をめぐる-』横浜近世史研究会編 横浜開港資料館 1988 [K25/128])
- ◆横浜開港資料館「議会開設期における一地方名望家の軌跡-『関口日記』にみる明治20年代』及び「『関口日記』年表稿-社会的活動を中心とする」(『市制施行と横浜の人びと-明治20年代の横浜』横浜開港資料館 1988 [K26.1/66])
- ◆西川武臣「幕末の農家の生活」(『図説横浜の歴史』横浜市市民局 1989 [K21.1/34])
- ◆西川武臣ほか「『名主日記』にみる幕末の世相」(『図説横浜の歴史』横浜市市民局 1989 [K21.1/34])
- ◆大口勇次郎「農民日記に見る女性像-生麦村関口家お愛の娘時代-」(『歴史評論』(479) 校倉書房 1990 [Z205/5])
- ◆大口勇次郎「農村女性の江戸城大奥奉公-生麦村関口千恵の場合-」(『19世紀の世界と横浜』横浜近世史研究会編 山川出版社 1993 [K26.1/88])
- ◆上田由美「関口昭知と新聞」(『開港のひろば』(84) 横浜開港資料館 2004 [ZC])

<その他>

- ◆野村兼太郎「徳川時代の私塾生活 - 和気塾塾生日記」(『むかしと今と』ダイヤモンド社 1940 [210.04/32])
- ◆山本健次郎「寺子屋から小学校へ」(『鶴見区史』鶴見区 1982 [K21.11/1])
- ◆西川武臣「幕末の生麦村の「商人」たち-『関口日記』から-」(『開港のひろば』(15) 横浜開港資料館 1986 [ZC])
- ◆西川武臣「商人の活動と流通の諸相」(『江戸内湾の湊と流通』西川武臣著 岩田書院 1993 [K68/251])
- ◆内田四方蔵「読書人としての寺子屋師匠」(『横浜の本と文化』横浜市中心図書館 1994 [K02.1/36])